

北アメリカ アラスカ

テキサス



ブラウズビル 住宅街



ハリケーン跡

筆者は中米、グアテマラを後にし、北上しメキシコに入ったが、メキシコの記録は書かれておらず、いきなり合衆国、テキサス州から始まっている。メキシコとアメリカの国境、リオグランデ川のメキシコ側国境の町に兄のアントニーが出迎えてくれた。国境の橋を渡ると、入国も簡単で合衆国滞在1年のビザを発給してくれた。建物を出ると、母親、ヨシコ、そして生後5月になる男の子、アユミ、そしてヨシコの父親、松本秀夫が待っていた。義父は今までいつも徒歩旅行を支援してくれた最も信頼、尊敬できる人である。人々が徒歩旅行を中止して帰って来ればよいという中で、義父だけが日本古来の伝統的考え方から「男子たるものは、初心はあくまで貫け、名誉を重んぜよ」と言って励ましてくれたのだった。

国境の町、ブラウズビルには2か月滞在。この間、今世紀最大のハリケーンに遭遇、南部テキサスの海岸地方から20万人もの人々が内陸部に避難した。宿泊しているホテルは電気、ガス、水道が3日間ストップ、エアコンも消えてみな耐え難い暑さの中で汗だくだった。暴風雨が収まってから、ハリケーンが去って一週間後、家族は帰国した。

米国最南部地方にて

合衆国南東部を通過中、ジョージア州、プレインズの町にやって来た。アメリカの記録はいきなりここから始まる。この町はジミー・カーター大統領の故郷で、人口600人足らずの町である。彼はここで引退生活をしており是非会いたいと思った。町に入るや町長の口利きでも会うのは大変難しいとのことであった。次に地方紙を訪ね、これまでの徒歩旅行を記事にして貰った。新聞社から「なぜカーター前大統領に会いたいのか」「大統領がジョージに会わなければならぬ理由があるか」という。二つ目の答え、南から北に歩いているうちに、中南米の多くの人々が自分自身の「自由讃歌」の夢に共感を持ってくれた。多種多様な人々の夢を理解し、元大統領として祝福をしてほしい」と述べた。翌日、新聞に掲載された。その効果か、カーターの叔母と義理の母が訪ねて来て、カーターが日曜日の礼拝で会ってもよいとの返事であった。白髪混じりの、やや前かがみの姿勢のカーターはどことなく弱弱しく、寂しげで、カメラマンの放列にさらされて、自分が思っていたカーターの印象とは全く異な

っていた。礼拝が終わり立ち去る際、僕の手を握るだけだった。翌日、カーターの義母に会いに行き、これまでのことを話しカーターには是非会いたいと話した。「一寸だけならば」と、指定された時間に再び訪問した。カーターの目は微笑んでいたが、何を言っているのか全く理解していない表情だった。二人並んだ写真を撮るとカーターは義務を果たすと、瞬く間にいなくなってしまった。(1980年11月、米大統領選でレーガン共和党候補に敗れたが、その後94年、クリントン政権下で北朝鮮とハイチに派遣され、2002年にはノーベル平和賞を受賞するなど活躍している。当時、ポケテはいなかったと思われる。2024年12月、100歳で没)

米国東部海岸にて



合衆国は、雑多な民族と宗教が渾然一体をなす地球上最大の国である。行く手にペンシルバニアの田園地帯が広がっていた。その時、メキシコのタスコで経験した以来の気温、摂氏36度という酷暑で、生い茂っている草木は、すっかり干からびてしまいそうな様相を呈していた。ペンシルバニアのオランダ地区で黒一色の男女を見かけた。彼らはメノー派の教徒で「プレーン・ピープル」と呼ばれ、18世紀風の旧習を固持し、現代の機会化文明を排除し続けている人々であった。

ニューヨークを越えてニューイングランドへ

アディロンダック山地の麓から北東に向きを変え、バーモント州のグリーン山脈に向かって進んだ。ニューイングランドの季節の変化、とりわけ、木の葉が冬に備えて、緑から燃えるような赤、金色、オレンジ色に変わる、あの秋の紅葉。少年の頃経験したあの四季の変化があってこそ人々の生活もそれぞれに応じて変わっていく。四季の変化に見られる一種の理想的パターンがニューイングランドで見られた。バーモント州の境界線を横切り、いよいよカナダに入国したのである。



グリーン山脈



カナダ国境 ドライブスルー

カナダ横断、太平洋に向かって突進する



ひとたびカナダに入ると、短銃を持った狂人が一発、発射して僕を撃ち殺してしまう心配はなくなった。北アメリカで唯一のフランス語圏ケベックを通りすぎる。時候は8月(1981年)というのに肌寒く、毛織のズボンにセーターの二枚重ね。氷結まではいかぬものの寒さはかなり厳しい。どこを通ってもフランス語ばかり。オンタリオ州を通過中、一つの事件に巻き込まれた。引いていたカートが行方不明となったのだった。置き去りにしていたのが悪かったのだが。中には日々の記録を記した日記帳があったのだったの

だ。ウェイバリーという所のオンタリオ警察に届けた。警官と一緒に探してみようとパトカーで、その日、歩いた道を探したが、見つからなかった。あきらめて、警察署に戻ったところ、あなたの荷物がトロント郊外で見つかりオンタリオ警察本部に届けられているという。翌日、取りに行った。幸いにして中身は無事だった。オンタリオ州をさらに奥に進んでいく所から雪がちらつき始め、それが次第に激しさを増していった。



カナダの危険な冬を過ごすため、徒歩旅行を中止してオンタリオ南部に小さな住居を見つけ、家族と暮らすことにし、11月、ヨシコと子供たちがトロントにやって来た。テキサス以来、一年以上の月日がたった、こうしてまた一年、1981年が終わろうとしていた。1982年の春、西に約3,000km隔てた太平洋に向かって突進し続けた。そして、夏までには北米大陸の丁度中央部に到達することが出来た。やがてついにロッキー山脈が視野に入ってきた。

北米大陸北部にむけて

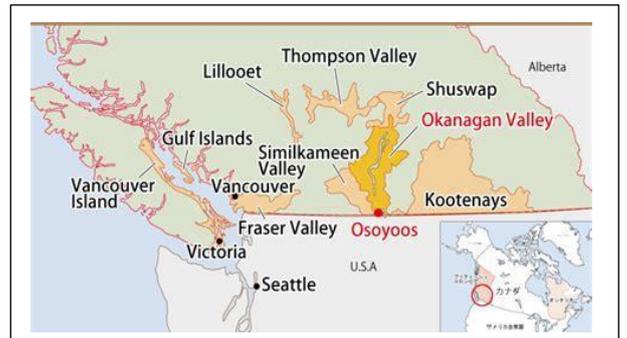
ロッキー山脈の麓を走っている峠道を経て、ブリティッシュ・コロンビア州に入った。警告を受けていたが熊の棲息率が増大する。人によっては小銃を用意するように勧めてくれたが、ホイッスルを購入して、いざというときに備えることにした。ある日の午後パイン峠でその機会に遭遇した。小熊だったが近くに親熊がいると思った。恐怖のあまり、膝ががくがくし震えた。笛を吹くどころではなかった。「絶対走るな」と聞いていたから少しづつ後退した。これが結果としてよかったと言われた。パイン峠を越え、涼しくてさわやかな感じがする夜、二人のインディアンの少年と横になってオーロラを見た。



バンクーバー



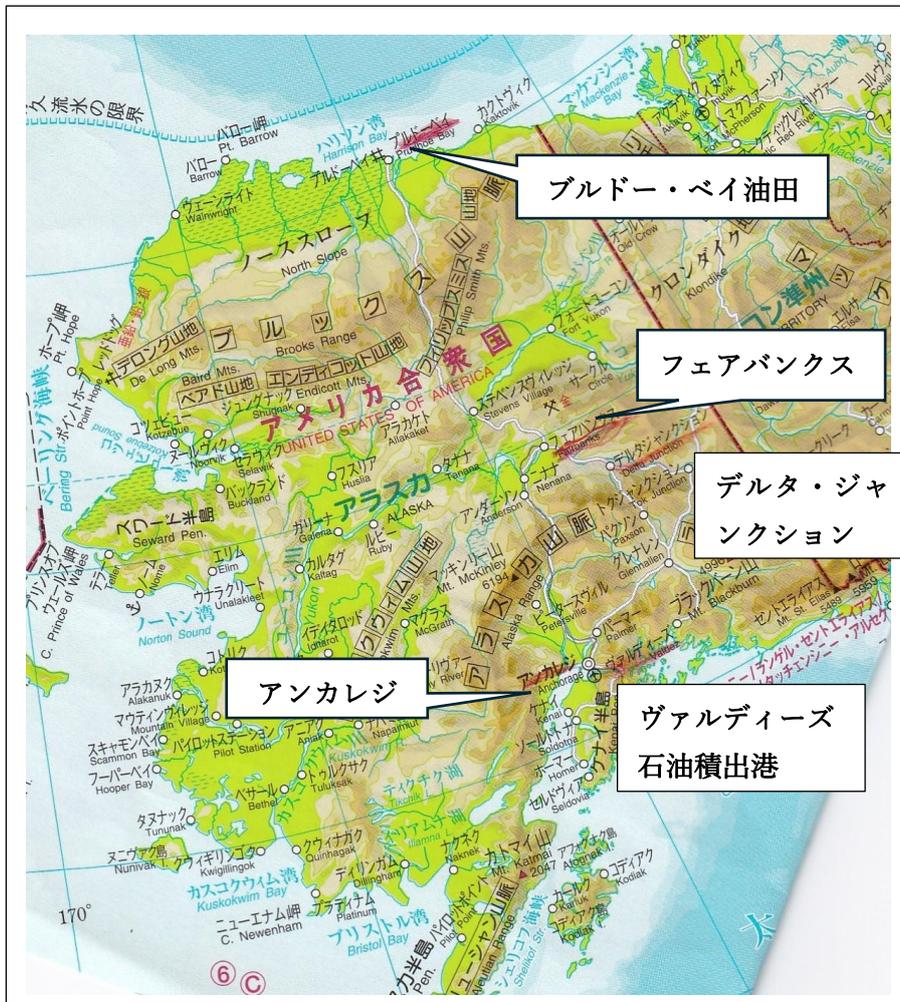
オーロラ



バンクーバーで家族と再会し一緒に冬を過ごすことにした。徒歩旅行の最後をヨシコと子供たちに同行して欲しかった。そこで、安価なマツダの中古車を購入した。以後、ヨシコが運転して、一家と一緒に移動するということになった。ヨシコは「私たちはまた一緒に道を進んで行くことになったねえ」と言った。歩く先にはヨシコと子供たちが待っている。そういう歩き方をして先を進んだ。標識がなくともカナダと合衆国の国境線はすぐそれと分かった。未舗装の道だったのが突然真新しいアスファルト道路に変わったからである。

アラスカ

どういふわけか、アラスカ領に入ると、そこは一面に青々とした常緑樹の生い茂る世界である、道路建設工事にかけるアメリカ人の意気込みのすさまじさに感嘆しているうちに延々30 kmにわたる道路改修工事現場の真ただ中に飛び込んでしまった。ノースウェイという町に到着する。この町の名は北米インディアンの一族、アタバスカ族の一酋長にちなんで名付けられたもので、酋長は107歳とのことで僕たちは会うことができた。酋長は昔話をしてくれ、一家をアタバスカ族のお祭りに招待してくれた。デルタ・ジャンクションでアラスカ・ハイウェイは終わった。ブリティッシュ・コロンビアのドウソン・クリークから2,275 kmの地点である。



ノースウエイ



デルタ・ジャンクション



フェアバンクス

※：フェアバンクス；アンカレジに次ぐ、アラスカ州第2の都市、人口約3万人（2014）北極圏から約800 km、夏は25°Cを超えるが、冬季はマイナス30°C～40°C。パン・アメリカン・ハイウェイの始点であり終点である。フェアバンクスから北極圏、ブルドー・ベイまでは約800 km。ダルトン・ハイウェイと呼ばれ、道路の大部分は未舗装。給油所が3か所あるのみ。出典：Wikipedia など

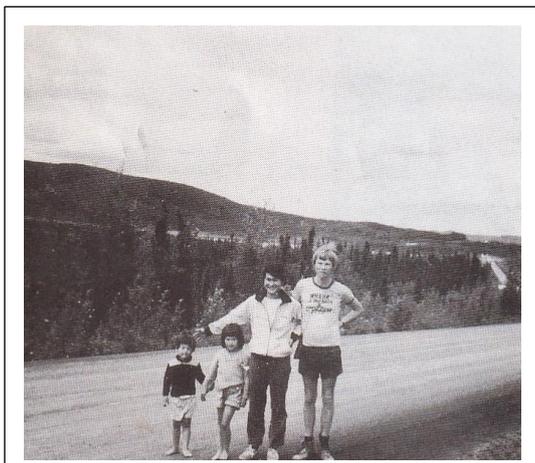
いよいよ、ウスワイア出発以来、29,600 kmの標石に近づいた。一度この標石を通過すれば人類史上、最長記録を極めた事になる。目標2 km手前の地点で立ち止まった。北極海接近は刻々近づいて来た。それから数週間はマスディアの関心をそこに集めるため忙殺された。フェアバンクスから北極海のブルドー・ベイまで約800 kmある。

以下、ヨシコが実家に送った手紙、「1983年8月9日、私たちはブルドー・ベイの南およそ400 kmの地点に来ています。フェアバンクスを基地として使い、徒歩旅行を再開しました。4車線が1車線となった。ジョージより先に車で行って宿泊場所を見つけ食事を用意します。カートンさんという丸太小屋の前で車を止めお宿をお願い。なんと15人もの子供がいたが、思い切って子供たちを3週間、預かってもらえないかお願いした。幸いOKしてくれたお陰で私たち2人は車の中に眠ることができ、先へ進むことができました。

8月18日、とうとう徒歩旅行の最終日。ただし、最後の16 kmは明日にとっておく。ロータリーエンジンのマツダ車が目的地まで運んでくれたことに、大勢のトラック運転手たちは驚いています。8月19日、とうとう最後の目的地、最北端ブルドー・ベイに着きました」

ヨシコが手紙を書いているとき、最後の道程4 kmは報道陣が見守る中、ヨシコと歩いた。砂利道の角を曲がった所に報道人、そして子供たちが待ち受けていた。最後に数メートル、子供たちとこれまで歩いて来た国々の国

旗がひるがえり、報道陣が見守る中ゴールした。すべてが終わった。

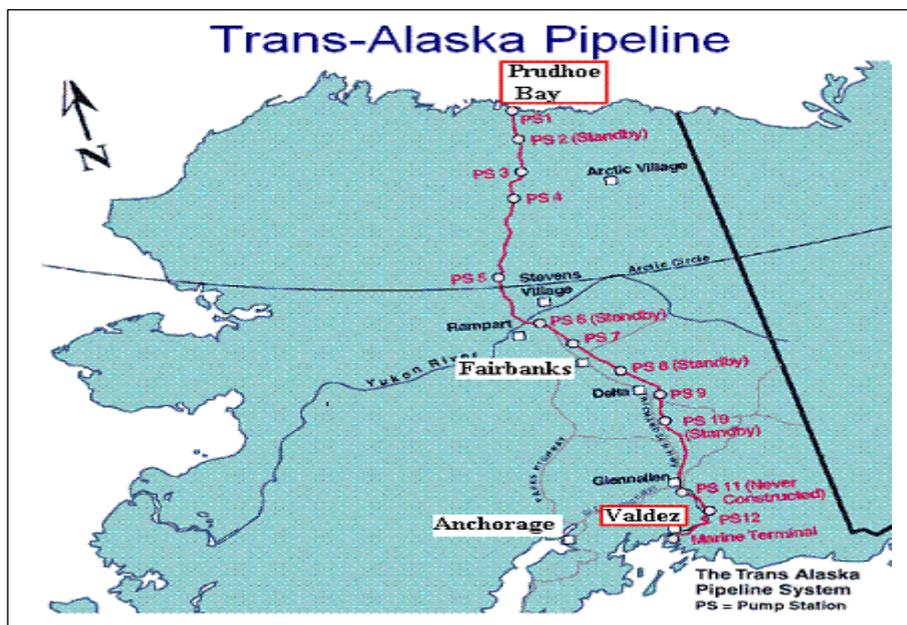


ゴールしてユニオンジャックの旗を立てる 親子4人記念写真 7年間の徒歩旅行を終わり母親といずれも、著者「世界最長の徒歩旅行 南北アメリカ縦断3万キロ」より。

補足

原著は400頁にわたるが、頁数の関係でメキシコ、アメリカ合衆国、カナダの大部分を割愛せざるを得なかったことは先に述べた。訳者が聞くとところよると全米ネットワークのTVに12回、ラジオ番組に19回出演したそうである。旅費を稼ぐ目的もあっただろうが、自己宣伝欲が強い人でもあったともいえるようだ。彼の本の出版元が倒産するという不運もあり翻訳が遅れる不運もあった。帰国後、神戸商船大学海事科学部准教授（英語講師）を勤めた後、2011年3月、(47才)退職。帰国した。ご健在ならば現在60歳になっている。

ジョージが到達した最北端の地、ブルドー・ベイはどんなところであるか、全く触れられていないので調べて見た。プルドー・ベイは北極海の沿岸に位置する油田で、1968年にARCOが発見した。プルドー・ベイと南部の積出港、ヴァルデースを結ぶ石油パイプライン総延長約1,300kmが1977年に完成した。野生動物の通行を妨げないように地上から浮かし、また冬季凍結しないようにヒートパイプの熱交換器がある。設計、施工管理は新日鉄（新日鉄以外その技術と施工能力はないとされ特命発注だった。）（出展：Wikipediaなど。写真はいずれも無料画像使用）



ブルドー・ベイ 油田





ジョージ・ミーガン 世界最長の徒歩旅行 北大陸縦断3万キロ 全その4 完